法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-02-05

ヨーロッパ日本研究協会(EAJS)第一二回国際会議

鈴村, 裕輔

(出版者 / Publisher)
法政大学大学院　国際日本学インスティテュート専攻委員会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
国際日本学論叢 / 国際日本学論叢
(巻 / Volume)
6
(開始ページ / Start Page)
89
(終了ページ / End Page)
97
(発行年 / Year)
2009-03-18
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003962

Hosei University Repository

学会の動向

ヨーロッパ日本研究協会（ＥＡＪＳ）第一二回国際会議

12th International Conference of the European Association for Japanese Studies

国際日本学研究所客員学術研究員
鈴村裕輔

一　はじめに

去る二〇〇八年九月二〇日から二三日にかけて、イタリア南部の都市レッチェにおいて、ヨーロッパ日本研究協会（The European Association for Japanese Studies: EAJS）の第一二回国際会議が開催された。筆者も報告者の一人として参加し、"The view toward the West of Okakura's *The Book of Tea*" と題する発表を行なった。

本稿は、ＥＡＪＳの第一二回国際会議の様子を報告するものである。

Hosei University Repository

二　EAJSについて

EAJSは国境を越えた国際的な学術交流を図るため、一九七三年に在欧の日本研究者たちによって設立された学会である。そのため、定款には「地理的にヨーロッパに属するあらゆる国における日本研究分野の学術研究を奨励、振興することを目的とする」[1]とあるが、EAJSの「目的の達成に関心を持つ個人なら誰でも、居住地や国籍に関係なく正会員になることができる」[2]とあるように、会員の門戸は広く世界各国に開かれている。その結果、二〇〇八年末時点で世界四五ヵ国から一二〇〇人以上が会員となっており、EAJSの規模はヨーロッパにおける日本研究の団体としては最大である。

原則として三年ごとに開催され、一九七六年の第一回以来、ヨーロッパの各都市で行なわれている国際会議の実施がEAJSの活動の中心である。これまでの国際会議の開催年、開催国、開催都市の一覧は表1の通りである。

表1　ヨーロッパ日本研究協会の国際大会の開催年、開催国及び開催都市

回数	開催年	開催国	開催都市
第1回	1976年	スイス	チューリッヒ
第2回	1979年	イタリア	フィレンツェ
第3回	1982年	オランダ	ハーグ
第4回	1985年	フランス	パリ
第5回	1988年	イギリス	ダラム
第6回	1991年	ドイツ	ベルリン
第7回	1994年	デンマーク	コペンハーゲン
第8回	1997年	ハンガリー	ブダペスト
第9回	2000年	フィンランド	ラハティ
第10回	2003年	ポーランド	ワルシャワ
第11回	2005年	オーストリア	ウィーン
第12回	2008年	イタリア	レッチェ

Hosei University Repository

このほかにも年三回の会報の発行や一八ヵ月ごとに開催する博士課程学生のためのワークショップ（workshop for doctoral students）の開催などが主たる活動として行なわれている。

三　レッチェとサレント大学の概要

第一二回国際会議（以下、国際会議）は、二〇〇八年九月二〇日から二三日にかけて、イタリア南部の都市レッチェで行なわれた。主催は現地のサレント大学（Universita del Salento）で、本会場としてグランドホテル・ティツィアーノが、また、副会場としてサレント大学外国語学部の校舎が利用された。副会場はグランドホテル・ティツィアーノから徒歩五分の場所にあり、移動が容易になるよう配慮されていた。

アッピア街道の終着点であるブリンディジの南方約四〇キロメートルに位置するレッチェはプッリャ州レッチェ県の県都で、二〇〇七年末の人口は約九万四千人である。「イタリア半島の踵」に位置することもあり、レッチェは古来より交易の要所として繁栄した都市として知られている。現在のレッチェの市域は、神聖ローマ皇帝カール五世が築いた城塞に由来しており、サンタ・クローチェ聖堂やレッチェの守護聖人である聖オロンツォの円柱といった建造物が立ち並ぶ市の中心街は、カール五世の城から通りを一本隔てたところに広がっている。

一方、サレント大学は一九五五年にレッチェ大学として設立された州立大学で、現在、法学部、芸術人文学部、工学部など八つの学部を擁し、約二万七千人の学生が在籍する総合大学である。二世紀の円形闘技場やカール五世の城、あるいは凱旋門といった建造物や、歴史的に価値のある図書、遺構などが数多く存在するレッチェとプッリャいう土

Hosei University Repository

地柄を反映して、一九九七年に文化財学部が設立されたのが、サレント大学の大きな特色のひとつである。

今回の国際会議の運営は、サレント大学の外国語学部が中心となって行なったが、同大学における日本語教育が始まったのは一九九八年と、大学の歴史の中でも比較的新しい。日本語の習得と学習を希望する学生は言語媒介技術学科に所属し、授業の中心は、文章の分析、文学、経済、政治、新聞記事から漫画に至るまで様々な種類の翻訳の演習である。また、二〇〇四年には学術文献翻訳修士課程が、二〇〇七年には東洋欧州言語文学博士課程が設置され、より高度で専門的な教育も行なわれている。二〇〇六年以後、大東文化大学、実践女子大学、京都産業大学、星美学園短期大学、東洋英和女学院と交流協定が結ばれ、現在、各大学と相互に交換留学生を派遣している。

四　国際会議の概要

国際会議は、九月二〇日から二三日まで行なわれ、参加者数は六〇〇名以上、四日間で延べ二〇〇〇人を越え、活況を呈していた。個別の発表は「都市学および環境学」「言語学と語学教育」「文学」「視覚芸術及び表現芸術」「人類学と社会学」「経済学、経済史および社会史」「歴史、政治及び国際関係」「宗教及び思想史」の八つの部門に分かれて行なわれた。各部門では、個人発表及びパネルセッション内での発表として、合計二七五の報告がなされた。（表2）

会期初日となる九月二〇日には、開会式と基調講演、各部門の基調報告ないし発表、そして歓迎夕食会が開催された。

Hosei University Repository

表2　各部門の名称と発表の件数

部門	部　門　名	発表の件数(1)
第1部門	Urban and Environmental Studies（都市学および環境学）	16
第2部門	Linguistics and Language（言語学と語学教育）	38
第3部門	literature（文学）	36
第4部門	Visual and Performing Arts（視覚芸術及び表現芸術）	42
第5部門	Anthropology and Sociology（人類学と社会学）	23
第6部門	Economics, Economic and Social History（経済学、経済史および社会史）	32
第7部門	History, Politics and International Relations（歴史学、政治学及び国際関係）	60
第8部門	Religion and History of Ideas（宗教及び思想史）	28

(1) 個人発表とパネルセッションにおける発表の合計

開会式は、今回の国際会議の会頭であるサレント大学のマリア・キアーラ・ミグリオレ教授の開会宣言で幕を開け、駐イタリア日本大使の中村雄二氏やEAJS会長のヴィクトリア・エシュバッハ＝ザボー氏らの挨拶の後、昭和女子大学の池上嘉彦教授による基調講演 "Linguistics and Poetics of 'Ego as Zero': The Japanese Speaker's Preferential Choice of Subjective rather than Objective Construal" が行なわれた。一九時四〇分から始まった歓迎夕食会はグランドホテル・ティツィアーノから徒歩五分のオリヴェターニ修道院（Convento degli Olivetani）で開かれ、四百人以上が参加して催された。

各部門での個人発表やパネルセッションは二日目となる九月二一日から本格化した。筆者は、自らが所属する第八部門「宗教及び思想史」を主としつつ適宜他の部門の発表も傍聴したが、いずれも熱心かつ活発な報告と質疑応答が行なわれていた。また、欧米の学会の恒例でもある午前と午後の「お茶の時間」は各日とも一〇時三〇分から一一時までと一六時から一六時三〇分まで設けられ、一二時三〇分から一四時三〇分までの昼食時

Hosei University Repository

間とともに、発表者相互の交流と発表や最新の学界の動向に関する熱心な議論の場を提供していた。

一八時に発表が終わると、旧知の間柄、あるいは今回の国際会議で新たに親交を結んだ人々の、レッチェ市街の観光を兼ねて夕食をとりに出かける姿が散見された。そこでも、日中と同様に、活発な意見の交換がなされたことであろう。また、今回は、参加者に対して、青地に両側が赤く彩られた国際会議専用の布製の鞄が支給されたが、宿舎から会場に行くための朝の街路や昼食や夕食のために出かける料理店などでこの鞄を手にする人を見るたびに互いに挨拶を交わす光景はほほえましくもあり、世界各地からレッチェという都市に参集したという一種の連帯感を醸成するためにも役立っていた。

最終日となる九月二三日は、一四時三〇分から全体会議と閉会式が行なわれた。席上、ミグリオレ会頭による全体の総括と各部門の議長から部門ごとの結果報告が行なわれた。これに続いて、ＥＡＪＳの運営状況の報告及び二〇〇八年から二〇一一年にかけての新執行部の体制の発表が行なわれた。また、二〇〇八年度から新たに設けられたＥＡＪＳ出版賞が発表され、英語三編、ドイツ語六編、ルーマニア語一編の候補作品の中から、オーストリア科学アカデミーのスザンネ・フォルマネック氏の*Die „böse Alte" in der japanischen Populärkultur der Edo-Zeit. Die Feindvalenz und ihr soziales Umfeld.* (Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2005.) が受賞し、表彰された。

その後、二〇一一年の第一三回国際会議の開催地が発表された。最終選考に残ったのはイギリスのシェフィールド、ポーランドのクラクフ、エストニアのタリンの三都市で、この中から、タリンが選ばれた。その結果、次回の国際会議はタリン大学を主催校として開かれることとなった[3]。

Hosei University Repository

五　国際会議に参加しての所感

参加者数、発表数のいずれもが、ＥＡＪＳの国際会議の規模の大きさを示していることは明らかである。そこは、各分野で一家をなす研究者から大学院生まで、ヨーロッパを中心とする各国の研究者が集まっており、文字通り日本研究の最先端の知見が披露される場所といえよう。このような学会で発表を行なうことの重要性は論を俟たないが、「国際日本学」という研究分野を有する法政大学からの報告者の数は決して多くないというのが現状である。管見の限りでは、法政大学大学院国際日本学インスティテュートの専担教員としてはスティーヴン・Ｇ・ネルソン教授、兼担教員としては西野春雄教授が発表者として参加していたのみであり、法政大学全体に対象を広げても、大学院経営学研究科の洞口治夫教授が第六部門「経済学、経済史および社会史」の基調報告を行ない、大学院国際文化研究科の森村修教授が第三部門「文学」で討論者を務めた程度である。

開催時期や費用などの問題もあろうが、日本研究の国際的発信という、法政大学が国際日本学研究の分野において担う役割を勘案すると、このような国際会議に対するより積極的な関わり方を模索することが必要ではないかと思われる。また、諸外国における日本研究を活発なものにするためには日本国内における日本研究の基盤を整備することが何よりも求められるのであるから、その意味でも、研究の成果を対外的に発信するためにも、ＥＡＪＳのような場を利用することは重要といえるだろう。

最後に、今回の国際会議における雑感をふたつ挙げて本稿を締めくくりたい。

Hosei University Repository

ひとつ目は、国際会議の会期中、献身的な努力によって発表者を側面から支援した、サレント大学の学生諸氏の活躍である。学会の主催校の学生が運営に協力することは、国内外を問わず通例となっており、その意味では今回もそうした例に従ったのみといえよう。しかし、四日という期間中、各部門において発表者が快適な環境を享受できたのは、そのような目に見えぬ協力者の存在があるからこそであり、この点はどれほど強調されても過剰ということはないであろう。

ふたつ目は、第八部門「宗教及び思想史」において行なわれた、ケルン大学のシャンタル・ヴェーバー氏の“Locating Cultural Turning Points through Network Analysis in the History of the Japanese Way of Tea”という発表である。安土桃山時代から江戸時代前期までの茶道を対象とし、茶道の発展と各派の宗匠たちの人的繋がりとに注目することで、茶道の歴史における文化の転換点を分析しようという試みであった。この研究の特徴は、文献学的な方法のみに依存するのではなく、例えば宗匠たちの人的繋がりを三次元的な表として描出するなど、従来にはない数学的、定量的な手法を案出し、適用しているという点に求められる。もちろん、茶会記といった基礎的な文献の読解が研究の基盤となっていることは当然だが、それにとどまらない方法論的な創造性は、日本研究の今後のあり方を考える上でも、示唆に富む内容であった。

筆者自身が聞くことができた発表は二四件で、全体からすれば一割にも満たないものであったが、こうした充実した報告に接することができただけでも、ＥＡＪＳの第一二回国際会議に出席した成果は大きなものであったということができる。

Hosei University Repository

註

（1） ヨーロッパ日本研究協会定款第二条。原文は Zweck des Vereins ist die Pflege und Förderung interdisziplinärer und internationaler Wissenschaft und Forschung im Bereich der Japanstudien in den Ländern des geographischen Europa. である。

（2） ヨーロッパ日本研究協会定款第三条第一項。原文は Mitglied im Status eines ordentlichen Mitglieds kann jede an der Verwirklichung der Vereinsziele interessierte natürliche Person, ungeachtet des Wohnsitzes und der Nationalität, werden. である。

（3） なお、国際会議の全体的な報告については、以下の文献を参照せよ。The European Association for Japanese Studies, "12th International Conference of the European Association for Japanese Studies" in *EAJS Bulletin*, 2008, 79: 8-26. である。